様式7　授業改善プロジェクト

アクション・リサーチのまとめ

英語教員指導力向上研修

受講番号 19071　**学校名** 室戸中学校　**氏名** 山﨑　麻美子

研究の背景

研究対象（学年、クラス等） 1年生　**生徒数** 48 名

科目名 1年生　**単位数（授業時数）** 3 時間　**使用教科書名** New Horizon English Course1 （東京書籍）

クラスの様子・特徴

全体的に明るく授業の反応が良い。声を出す音読練習などは意欲的に元気よく取り組むことができる。しかし入学当初から集中力の継続が難しい。授業の流れを止めるような発言もよく出てくる。学習意欲の温度差や学力差も大きい。

問題の確定

声が出るという長所を生かして、みんなで学び合うことができる学習雰囲気を作りながら、苦手とする「書くこと」の向上を図る。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
音読やスピーキング活動などは積極的に取り組むことができる。しかし私語が一旦始まると収拾がつかなくなる。一人でじっくり取り組むことが苦手傾向にある。	6月のアンケートでは、70%の生徒が英語の授業が楽しいと感じている。「外国人と話したい」「洋楽を聴きたい」「英語の本を読みたい」など、実生活に生かしたいという願いがあることがわかった。	6月の音読チェックではA評価が59%、C評価が9%、writingチェックではA評価が6%、C評価が52%であった。1学期末テストでも、「自己表現（書くこと）」の正答率が低かったことから「書くこと」を苦手としていることがわかった。

リサーチ・クエスチョン

「書くこと」を意欲的に取り組ませるには、どのようにすればいいか。

仮説・実践・検証

仮説1 ⇒	実践1 ⇒	検証1
ペアやグループで共に学びあう雰囲気を意識した音読練習を仕組めば、意欲的に取り組み、「書くこと」への動機づけになるのではないだろうか。	授業の始めに音読練習を取り入れ、一斉・個々・ペアで練習し、repeat・shadowing・read＆look upなど様々な形態をとることで飽きさせないようにした。単元終了後、個々の本文の音読チェックを行い、合格すれば個人シートにハンコやシールで評価した。教師だけがチェックするのでなく、生徒の中からサブティチャーを選び、生徒同士で‘教え合い・学び合い’ができるようにした。	ほぼ全員が意欲的に取り組むことができ、9割近くが2学期までの音読チェックに合格した。ペア練習や仲間の教え合いを促進することで、サブティーチャーとなって仲間に教え自信がついた生徒や、逆に教えてもらって前向きに取り組み始めた生徒など、学習雰囲気が変わっていくことを実感した。アンケートでは肯定的評価が圧倒的で、8割が英語学習に役立っていると答えた。
仮説2 ⇒	**実践2 ⇒**	**検証2**
音読で語順を意識すれば、文の構造を理解し、「書く」活動に生かされるのではないだろうか。	教科書本文の日本語を教師が、それに対応した英語を生徒が言うという活動に取り組んだ。例えば、①教師「彼女は住んでいます」生徒「She lives」、②教師「カナダに」生徒「in Canada」、③教師「彼女は住んでいます　カナダに」生徒「She lives in Canada」という流れである。たまに、一部の単語を変えて言わせるなど、復習しつつほどよい緊張感を持たせマンネリ化させないよう留意した。	日本語と英語を交互に言っていく際に、リズムを崩さないことを心がけることで、生徒もリズムに乗って、言うことができていたと思う。アンケート結果からは、半数が語順音読は役立っていると感じているが、役立っているかどうかどちらともいえないと答えた生徒が30%ほどいた。音読に重きを置き、それを生かすことができる活動を授業内に多く取り入れられなかったことが反省である。
仮説3 ⇒	**実践3 ⇒**	**検証3**
副教材を使い、できるだけ多くの英文に触れさせ、それを使って自分自身のことについて書く練習を重ねていけば、「書く」力が伸びるのではないだろうか。	文型ドリルを使用して、できるだけたくさんのターゲットセンテンスの例文に触れさせた。各自にライティングノートを準備させ、音読練習後、一定時間内に書き取り練習に取組ませた。音と文字、英語と意味（日本語）がつながったところで、自己表現にトライさせた。	音読したものをすぐに文字化し、そしてまねることで、スペルや語順の習得、意味の理解には効果があった。しかし、音読が中心となり、この流れを継続して入れていくことができなかった。そのためライティングテストでは、効果があまり見られなかった。しかし同一の並べかえ問題で正答率が伸びたことから、漠然と覚えている英語を確かなものにするという次のステップへとつなげていきたい。

研究の成果

継続的な音読練習により、現在も大きな声で元気よく取り組めている。アンケートでは音読を肯定的に評価し、様々な場面で役立ったと実感している生徒が多々いた。また単元ごとの音読チェックで達成感を味わい自信がついた生徒も増えた。生徒によるサブティーチャーの活用が学習における仲間同士の関係作りに大きく効果があり、学習意欲の喚起につながったと感じる。並べかえ問題では全体の半数近くが満点、75%がA評価であったことから、音と文字と意味が一致する段階に達していることがわかった。一年間のARでは、データをとることで生徒の実態と課題が明白になり、それにそった手立てをすれば成果が表れるということを実感した。今後もこの研修を生かして楽しく・力がつく授業を目指したいと思う。

今後の授業改善の課題

音読により音と文字と意味が一致し、文の構造も理解できている段階にいる。次は自分の思いや考えを文に表していくことが課題である。既習事項を暗記する学習から、それを活用する学習へと移行させていきたい。また受け身的な学習から自発的な学習へ進めるために、授業内に空いた時間を有効利用できるような課題を与えたり、家庭学習でターゲットセンテンスを使った自己表現文の作成など、授業とリンクさせた指導をしていきたい。

リサーチについての問合せ先：　職場電話　0887-22-0518